

時又港

隆盛を極めた通船業

通船の最盛期を迎えた明治の終わりから昭和の初めにかけて、天竜川は伊那谷と遠州地方をつなぐ重要な水の道として栄えた。時又付近の川瀬は深く緩やかに澱み、絶好の船着場であった。その後、各所に設けられた発電ダムにより、水の道は分断されて終焉した。現在の時又港は、観光遊船(弁天港～時又港)の到着場所として利用されている。



穏やかな流れの時又港周辺



船下りの様子



「ウェストンの碑」
「天竜川の激流の碑」



観光遊船の到着場所としての時又港

information

□ アクセス

飯田線時又駅から
500m
徒歩→6分

□ 所在地

飯田市時又



定期客船

明治時代に入ると、鉄道の普及や道路の整備によって、通船にも変化がみられた。1891(明治24)年の宣教師ウェストンの船下り以降、時又の名は海外にまで知れ渡った。乗船客の増加に伴い、定期客船が時又～中ノ島(現浜松市)間を月に12回運航するようになった。

船下りと積荷

下り便に米や柿等の荷物と乗客とを1船に乗せ、旅客は船下りを楽しみ、上り便には和紙の原料のコウゾ、魚、茶、塩等が積まれた。現在の時又は、高い石堤ができ、昔の通船の港としての面影はほとんど残されていない。



(国土地理院の数値地図25000(地図画像)を使用)